

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

冒険遊び場が、この地上に最初に姿を現したのは一九四三年、デンマークの首都コペンハーゲン郊外においてであった。この新しい遊び場を考案したのはデンマークの造園家ソーレンセン氏である。通りかかった建築現場で遊ぶ子どもたちの姿をみて、子どもの遊び場は、本来、子どもたちが自由にかたちを変えることができる^①ヘンゲンジザイな空間でなければならないと考え、設計し造ったのがコペンハーゲン郊外のエンドラップでの冒険遊び場であった。

デンマークに新しい遊び場ができたことを聞いた一人にイギリスのアレン・オブ・ハートウッド^{オボ}卿夫人がいた。かねてから、子どもの福祉の向上に寄与しており、子どもの遊び場についても関心をもち本なども書いていた夫人は、第二次大戦が終わるとすぐにエンドラップを訪問した。そこで見た遊び場こそ子どもたちに必要だと実感した夫人はイギリスに戻ってすぐに本国での冒険遊び場づくりに精力を注ぐと同時に、それを世界に広めるべくさまざまな活動を開始した。こうして最盛期にはイギリス国内だけで四〇〇か所の冒険遊び場がつけられた。

アレン卿夫人の呼びかけに応じて、冒険遊び場は、スウェーデン、ドイツ、オーストリア、ついでフランス、イタリア、アメリカ、カナダなどに普及していった。欧米諸国が中心であったにしろ、冒険遊び場が各国にかなり広まっていった一九五九年、国連で「児童権利宣言」が採択されることになった。宣言の第七条には教育権と並んで遊びの権利(遊育権)も明記されていた。教育権の実現については、国家はじめ、他のいろいろな組織や団体が動くだろうが、遊ぶ権利は誰が保証するのか。私たちがやるしかない。そう考えたアレン卿夫人と、それに各国で子どもの遊びにかかわっていた人々計一七人が集まり、国際的な組織を立ち上げることにした。それがI.P.A.であった。そして今、北米、南米、アジア、オセアニアを含む三〇か国、計二〇〇〇人ほどの会員を擁する国際ボランティア組織に成長している。

では、冒険遊び場とはどんな場所か。ロンドン遊び場協会が発行している宣伝用のパンフレットが簡潔に要点を整理して説明しているので引用しておこう。

「冒険遊び場は、狭苦しくなった都市空間ではできなくなった多くのことが自由にできる場所であると説明するのがもつともわかりやすい。広さは三分の一エーカーから二エーカー（一エーカー＝約四〇五〇m²）までさまざまであるが、ここでは廃材を使って小屋や登り塔を作ったり、焚き火をしたり、料理をしたり、穴を掘ったり、野菜をサイバイしたり、動物を飼ったり、砂や水や粘土で遊んだりすることができる。その雰囲気は自由であり寛大である。……」

冒険遊び場には必ず常駐のプレイリーダーがいる。彼らは子どもたちの友だちであり、子どもたちがしたがっていることをうまく手助けし、それを実現させてくれる人たちである。また、冒険遊び場には付設の建物があり、そこにはプレイリーダーの事務室があるだけでなく、さまざまな工作道具や絵具や芝居の衣装や遊具やゲームや本やレコードや楽器などが備え付けられていて、それらを使って遊べる空間もある。……」

要するに、冒険遊び場とは、「子どもの身体や、欲求や、行動は、発達段階に応じて、どんどん変化するものであり、また同じ年齢でもその子によってさまざまに異なるものである。それゆえ、どの子のどのような欲求にも応じることができ、また子どもの欲求をカンキする刺激に富んだ環境こそ、子どもの発達に望ましい」という哲学にもとづいて作られた場所ということである。

それぞれの子の実際を見極めながら、それぞれの子の発達を援助することを仕事とする専門職者たるプレイリーダーが常駐しているのも冒険遊び場の特徴である。プレイリーダーは、欧米諸国では、学校の先生と同じ地方公務員として働く専門職者である。もちろん教師がそうであるのと同じように、大学の専門課程でそのための専門的な教育を受けてきている。大学におけるプレイリーダーの養成課程といっても、修業年限やカリキュラムなどは、国や大学によって多様である。例えば、デンマークの場合、修業年限は三年、教育学や心理学や社会学や社会医療学などの学科を学ぶほか、音楽や演劇や話法、絵画や工芸の実技、それに救助法や実用法規、そして遊び場や青少年施設などでの合計七五〇時間ほどの実習が加わり、年間約九〇〇時間ほどの課程

を修めることになる。残念ながら、わが国の大学に、プレイリーダーを養成する専門課程はいまだない。

ところで、プレイリーダーの役割はただ子どもの遊びや活動をサポートするだけではない。子どもたちのよき話し相手になり、ときには悩みの相談にも応ずることになる。そして、遊び場でさまざまな催しをすること、子どもたちを地域の大人たちと引き合わせる役割もする。こうした人たちが子どもの間近にいつもいることが子どもにとってどんなに心強く頼もしいことか。冒険遊び場は、都会の中の薄汚なく雑然とした空間などではない。

わが国で冒険遊び場といわれる遊び場があることが知られ、実験的に開設されるようになったのは、オイルショックがあり経済の高度成長にかげりが見え始めた一九七〇年代半ば頃からのことである。一九七四年の八月から一〇月までの二か月間、毎週日曜日の午前九時から午後三時まで、佐賀県唐津市で唐津青年会議所が「冒険村」としてオープンしたのがわが国最初の試みであった。以後、八〇年にかけて青森市、横浜市、宝塚市、福岡県宗像町など一〇か所ほどで実験的に開設されたが、その中で特筆すべきは、何といつても、東京都世田谷区に開設された羽根木プレイパークである。

一九七九年は国際児童年であった。世田谷区が、児童年を記念し単年度事業として開設したのが羽根木プレイパークであるが、住民や子どもに与えたインパクトは大きく、以後今日まで続いている。世田谷区にはその後、世田谷プレイパークと駒沢はらっぱプレイパークが開設され、今また一つ鳥山^{かみやま}プレイパークが開かれようとしている。世田谷区で冒険遊び場が広がっているのは、行政の理解があるのもさることながら、住民や子どもたちの評価が高いからのことである。

羽根木プレイパークが開設されて二〇年になるが、ここ二、三年ようやく冒険遊び場が世田谷区以外でも開設されるようになった。感度のニブ^④かった教育関係者や、一般の住民もようやくその意義を認めざるをえなくなったということであろう。第一期の中央教育審議会が、答申の中でプレイパークの意義について言及したのに続き、九九年の子供の日の朝日新聞が「冒険遊び場を広げよう」という社説を^⑤ケイサイしたこともその現れの一つである。

冒険遊び場が認知され、全国的な広がりを見せ始めるまでになった最大の理由は、子どもや子どもをめぐる状況がますます悪

くなっているという社会的背景もあるが、羽根木プレイパークが、住民に支えられ存在し続け、子どもたちの人間としての成長に好ましい影響を与えてきたことにあるといわなければならないだろう。子どもにとっての存在価値を改めて整理すれば次の三つになるう。

(1) 子どもに多様な大人と出合わせ、彼らと相互行為のできる機会を与えたこと。

(2) 子どもにさまざまな体験をさせることで、身体で学ぶ場を用意したこと。

(3) 遊び場での、子どもと子ども、子どもと大人、大人と大人の出会いが、地域での新しい活動を作り出すきっかけを作ったこと。

羽根木プレイパーク自体の存在価値は他にもある。例えば、住民が主体となつて運営し実績をあげ、行政側の住民への認識を変えたこととか、住民と行政の協力の仕方の新しいかたちを作ったことなどである。しかし、子どもの社会力の形成という観点からすれば、その意義は右の三つになるだろう。多くの大人たちが、冒険遊び場が子どもたちにもたらすさまざまな価値を認識し、それぞれの地域で冒険遊び場の開設に向け活動を開始することを期待したい。

冒険遊び場がどんないきさつで造られ、世界に広がったのか。冒険遊び場とはどんな場所か。わが国における冒険遊び場づくりはどのようなものか。わが国での常設冒険遊び場のサキガけをなした東京都世田谷区の羽根木プレイパークの存在価値は何か。こうしたことについて、やや急ぎ足で語ってきたが、最後に、このような場所が「地域にある」ということはどういうことかについて考えてみたいと思う。

冒険遊び場は、見た目には汚いし廃材などが散らかり雑然としている。箱庭のような日本庭園好みの日本人の美意識にはまずそぐわない空間といつていい。冒険遊び場は、また、言葉通り危険な場所でもある。刃物は使うし、火は焚くし、高い木には登るしで、ケガをする可能性は常にあり、下手したら死に至ることだってなくはない。床の間に飾るように育てるのが子どもを大事に育てることだと考えている、大方の日本人にはケイエンされる^⑦たくいの場所である。なのに、世田谷区の住民がこうした

場所をあえて作り、維持しようとするのはなぜか。苦しい財政から毎年少くない予算を捻出し、プレイリーダーなる一見子離れしていないような人間を採用し、事故が起こった場合の対応に常におびやかされ、少なからぬ住民の苦情に悩まされながら、それでも冒険遊び場を作り維持しようとするのはなぜか。

数々の冒険を冒しても、あえて冒険遊び場を作り維持している地域には、他の地域にはない、特別の何かがあると考えるのが尋常である。では、他の地域にはない特別の何かとは何か。それは、おそらく、そこに住む父母たち多くの、「わが子をよく育てたい」という熱い真剣な思いに違いない。さらには、地域の子は地域で育てようという姿勢であろうし、自分が住む地域をよくしたいという志向ではないかと思う。^⑥煎じ詰めれば、地域住民の中に、第四章第2節で述べたような意味でのコミュニティ意識が強くあるということである。

繰り返しれば、地域の大人たちに、わが地域に対する愛着があり、永住意識があり、地域へのコウケン意識があり、地域づくりへの参加意識があるということである。地域に冒険遊び場があるということは、単に、子どものためのユニークな遊び空間があるというだけでなく、地域の大人たちに地域をさらによくし、盛り立てていこうとする志向があることを暗示するものである。であればこそ、さまざまな犠牲を払い、負担を負いつつ冒険遊び場を作り維持していきけるのだといえる。

子どもたちにとってみれば、このようなコミュニティ意識があり、それに支えられた大人たちの地域づくりにつながる活動がなされている地域こそ幸いである。なぜなら、そうした大人たちの活動の輪の中に、子どもたちが取り込まれることによってこそ、子どもの社会力は見事に育つのだと断言できるからである。

最近、いっこうに収まらない子どもの病理現象に苛立ち、親は自分の子をしっかりとつづけておくと、学校での徳目教育に力を入れるとか、果ては、義務教育の役割は子どもを一人前の社会人に育てることにあるのであって、そのためにはイヤがる生徒を力で抑えつけても基礎的な力をつけてやらねばならない、だから親も地域も教師に協力しろ、といった言説がコワダカに言われ、多くの支持を得ているように思われる。しかし、子どもの社会力はそうしたことでたやすく育つようなものではない。子どもの社会力は、生きることに対する大人たちの前向きな姿勢があり、それから発する強いコミュニティ意識があり、それに根差した

大人たちの、地域づくりに連なるさまざまな活動があり、その中に子どもを取り込みつつ重ねられる大人と子どもの相互行為の過程で育てられ強化されていくのだと考えるべきである。

そして、その過程は相当に長いものである。とすれば、子どもの社会力をきっちり育てられるかどうかは、大人たちが、子どもにまつとうに向き合い、その長い過程に腰を据えて付き合えるかどうかにかかっているのだともいえる。人類社会が遭遇することになるこれからの社会を見据え、今こそ、次の時代を担う若い世代の社会力を育てることこそ肝要とこころえ、それに徹する覚悟をしてほしいと思う。大人たちの生きる姿勢や生活態度やライフスタイルを大きく転換する必要があるとした所以である。多くの人びとの賛同が得られることを祈りたい。

(門脇厚司『子どもの社会力』より)

(注) IPA——「国際遊び場協会」、現在の「子どもの遊ぶ権利のための国際協会(国際遊育権協会)」。組織。国際的なボランティア

第IV章第2節——本書第IV章「子どもの成育環境はどう変わったか」の第2節「失われた地域のコミュニティ機能」の中で筆者は、単なる「人間が住んでいる一定の居住区域」である「地域」でなく、「そこに住む住民一人ひとりの心の中にある志向、その志向にもとづいた活動の継続」である「コミュニティ」が子どもの社会力を形成して行くと述べている。

問一 傍線部①く⑩を漢字に直せ。

問二 傍線部A「床の間に飾るように育てる」、C「煎じ詰めれば」はどのような意味か。説明せよ。

問三 傍線部B「プレイリーダーなる一見子離れしていないような人間」とあるが、「一見子離れしていないような人間」とはどのような人間か。本文に即してわかりやすく説明せよ。

問四 傍線部D「大人たちの生きる姿勢や生活態度やライフスタイルを大きく転換する必要がある」とあるが、筆者はなぜそのように考えているのか。説明せよ。

問五 筆者は「子どもの社会力」をどのようなものとして捉えているか。文脈に即して百五十文字以内で説明せよ。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

盗を逐ふに心得べき事

備中吹屋村、大塚理右衛門、名は宗俊は、銅山の事に達せし人なり。或夜盗人入りて物盗み出さんとするを、「やよ、盗人よ」と大音上げて追ひかけしかば、盗人あはてて、盗みし物もおとし置きて逃れさりぬ。其の声におどろき家内のもので皆々馳せ集まりしとき、宗俊云はく、「はじめ盗人入りて、我が鼻息を伺ふこと再度にして、爰かしこを捜し出し、静かに荷物をととのへて出でんとす。其の時われ枕刀をぬぎて進み出でたるなり。始めは盗人の心専らにして勢ひもさかんなり。其の時に向かへば或いは怪我あらんもはかりがたし。彼心のままに仕課せて、今は氣勢もゆるみたるときに、進みかけしによつて、盗みし物もおとし置きしなり」と語りければ、みな感服せしとなり。

同じ国何某村に、昼盗の入りしを主人はるかに見て、棒を掲げ其の跡を追ひゆき、今市といふ町を過ぐるにも声をかけず、町を一町ばかりもすぎで、「待てよ盗人。町を過ぐる時声をかけなば、わかきものどもの棒ちぎり木にて馳せ集まり、汝を害せんも計りがたし。ここにて呼びかけしは汝をたすくるの一計なり。盗みし物をことごとく返さば外に望みはなし。いかにいかに」と近よりしに、盗人土に手をつき詫言して、取りしものはことごとく返して去りけるが、其の後一年ばかりすぎて、この盗人筑紫のかたより帰りぬとて、よき脇指一腰をもて来りて、「過ぎし昼、盗みしてゆるされし命の恩をむくいん」といひしかば、主人、「汝が物をとらんとらば、其の時其の儘にてかへさんや」と叱りたれば、盗人涙をおとして辞し去りぬとぞ。今かかる御治世に生まれて、水と火と盗との外はおそるべきものなし。水は其のきたること漸あれば、預め用心もなるべけれど、火と盗は不意にいづれば、人皆心得べきことなり。

(菅茶山『筆のすさび』より)

(注) 備中吹屋村——現岡山県川上郡成羽町。吹屋銅山があり、享保七年(一七二二)から大塚理右衛門家が採掘を請け負って

いた。

今市——現岡山県井原市。

棒ちぎり木——両端を太く中央をやや細く削った棒。物を担うためのものであつたが、喧嘩けんかや護身用にも用いられた。

漸——前兆。

問一 右の文章は大きく二つの段落に分かれているが、後の方の段落をさらに二つに分けるとすれば、どこで区切るのが適切か。区切った後の始まりの五文字を抜き出して答えよ。

問二 傍線部①「二計」、②「水と火」、③「なるべけれど」の意味を記せ。

問三 傍線部④「始めは盗人の心専らにして勢ひもさかなり。其の時に向かへば或いは怪我あらんもはかりがたし。」を現代語訳せよ。

問四 傍線部⑤「盗人涙をおとして辞し去りぬ」とあるが、盗人はなぜ涙をおとしたのか。わかりやすく説明せよ。

第三問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(設問の関係で、返り点・送りがなを省いたところがある。)

吳王欲^シ伐^ラ荆、告^ニ其^ノ左^ニ右^ニ曰^{ハク}、「敢^{ヘテ}有^{ラバ}諫^{ムル}者^死。」舍^ニ人^リ有^ニ少^{ナル}孺^子者^欲諫^ス
 不^レ敢^①、則^キ懷^キ丸^ヲ操^{ツリ}彈^ヲ遊^ビ於^ニ後^ニ園^ニ、露^ニ沾^ニ其^ノ衣^ヲ、如^キ是^{クノ}者^三旦^{ナリ}。吳王曰^{ハク}、「子
 来^{タレ}。」何^②苦^ク沾^ル衣^{如此}。」对^{ハク}曰^{ハク}、「園^中有^リ樹[、]其^上有^リ蟬^{。蟬}高^ク居^{リテ}悲^シ鳴[、]飲^ミ露^ヲ
 不^レ知^ニ螳^螂在^ニ其^ノ後^ニ也^{。螳螂}委^{マケ}身^ヲ曲^レ、附^{シテ}欲^{ラント}取^ル蟬[、]而^レ不^レ知^ニ黃^雀在^ニ其^ノ
 傍^ニ也^{。黃雀}延^{バシテ}頸^ヲ欲^{シテ}啄^ニ螳^螂、而^レ不^レ知^ニ彈^丸在^ニ其^ノ下^ニ也^{。此}三者^皆
 務^{メテ}欲^{ント}得^ル其^ノ前^利、而^レ不^レ顧^ミ其^ノ後^之有^ル患^也。」吳王曰^{ハク}、「善^キ哉^③。」乃^チ罷^シ兵^④。」

(注) 荆——春秋戦国時代の楚の国の別名。

舍人——主君の身近に仕える官。

少孺子者——若い男。

(劉向『説苑』より)

丸——はじき弓のたま。

弾——はじき弓。

螳螂——かまきり。

問一 傍線部①「則」、②「対」、③「哉」の読みを、送りがなの必要なものはそれも含めて、平仮名で答えよ。

問二 傍線部A「欲諫不敢」を現代語訳せよ。

問三 傍線部B「何苦沾衣如此。」を書き下し文に改めよ。

問四 傍線部C「乃罷兵。」とあるが、荆の国を伐とうとしていた呉王はなぜ兵を送るのをやめたのか。本文に即してわかりやすく説明せよ。

第四問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

本当は自然界は有限なのだから、いつかは資源の利用が不可能になるという指摘は近代社会が形成されてから何度もだされたが、その都度「今のところはまだあたかも自然界が無限であるかのような想定のもとに経済活動を営んでもさしつかえない」という答えが出されてきた。

しかし、二〇世紀の末に警告の大きなベルが鳴り響いた。一九七二年に出たローマクラブ報告『成長の限界』である。これ以上、石油を使い続けければ石油が二〇年で枯渇するというデータが示された。そのデータは修正されたが、二一世紀の基本的な理念は、「未来世代への責任」であろうという予測は正しい。環境を破壊し、資源を枯渇させ、廃棄物を累積するという未来世代への負の遺産を残してはならないというのが、二一世紀人類の避けられない課題となる。そして産業と技術を測る尺度は「持続可能性」でなければならない。

人口問題の視点から見るとき、地球上の人口が歴史上最大になり、そこからゆるやかに減少して定常化に向かう。すると最大の人口になったときに、食糧不足が起きないかということがとても心配になる。しかし食べ物だけではない。住宅も学校も病院も歴史上の最大量になる。すると人口が減り始めたときは、廃棄物が大量に出るかもしれない。それを避けるには、最大ピークのときの需要をまかなう技術が、前もって廃棄物の出ない形になっているといい。つまり、ゼロエミッション化が製造工程の不可欠の条件になる。

なにはともあれ廃棄物を最少にするというのが二一世紀のライフスタイルの中心になる。使える(耐用)年数から使った(使用)年数を差し引いた年数が廃棄物年数である。使用年数が長いものは耐用年数がついていけなくなつて、修理に修理を重ねて何とか長持ちさせる。たとえばレオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」は、描かれたときからいたみやすい材料が使われていたと

いわれるが、戦争のために細片になってしまったけれど復元の努力がなされている。これは使用年数が耐用年数を上回っている例である。

パソコンは三年半でスピードが二倍になる。古いパソコンを立ち上げて使ってみると遅くて我慢ができなくなる。自動車では、三年半前に時速一〇〇キロのスピードで走っていた人が、今二〇〇キロで走っているということはない。自動車は、三年半で最大スピードが二倍になるということはない。

パソコン類のように技術開発が激しい領域からたくさん廃棄物が出てくる。すると初めから廃棄物にする部分と、そのまま使いつける部分とを分離できるようにして、一部分を廃棄したいから全体を廃棄してほしいという要望に対して、中味だけ新しくするという方向付けができていく。

長持ちさせるという方向付けで大きなものは建造物である。廃棄物を最少にしようとすれば、段ボール箱にビニールをかけた超短期住宅か、それとも幾世代にも住み継がれる永久住宅かという選択になる。建築物の場合、廃棄物の完全処理が困難なので、大枠では使用年数の長期化という技術戦略が廃棄物を減らすという点で正しい。たとえば二世帯住宅では、祖父の住む使用年数と父の住む使用年と子の使用年が重なる。すると二世帯住宅は、使用年数が二倍になることを意味するのではなくて、⁽¹⁾使用年数が無限になることを意味する。

ところが日本の家は寿命が短い。

(1) 住宅の除却年数——同年度の資産台帳に記載された住宅の半数が、取り壊される年数。アメリカ一〇〇年、日本四〇年。

(2) 住宅の代替わり周期——全住宅戸数を年間建設戸数で割った数字。イギリス一四一年、フランス八五年、ドイツ七九年、アメリカ一三〇年、日本三〇年。

(3) 住宅への投資周期——全世帯数を年間建設戸数で割った数字。イギリス七三年、フランス五九年、ドイツ五六年、アメリカ三八年、日本二三年。

(木俣信行「持続可能な住まいの実現」、水谷宏編『地球の限界』所載、日科技連、一九九九年、二四〇頁)

除却年数に関して、半分の家が建て代わっているときに思い出の町を訪ねるには、アメリカならば一〇〇年後に訪ねていけばよいが、日本ならば四〇年待てば、その時はやってくる。⁽²⁾

代替わり周期に関して、今ある家の三〇分の一が建て替え中であり、三〇年たてばすべて新築になる。鉄筋コンクリートの建造物について同じ数値をとったところ、一四・八年という結果が出た年がある。これは鉄筋コンクリートの建造物が一四・八年の耐用年数で十分であることを意味する。

投資周期に関して言えば、日本ではどの家も二三年に一度は家を建てるということである。イギリスでは平均して一家は七三年おきに普請⁽³⁾をするので、一生、普請をするというチャンスが回ってこない人もいることになる。日本文化は、個人の住宅についてもまるで「はかなさ」という伝統的美意識を持ち込んでいるようだ。

美術史家の高階秀爾氏によれば「日本美術の特色はミニメンタルなもの不在にある。風雪に耐えてそそり立ち、自分こそは永遠に存続して見せるぞと意地をはっているような持続性がないというのが日本美術だという。いつかは必ず無になるという必然性を背負い込んでいるというだけではなくて、その無になることをみずから引き受けているという態度を示している「はかなさ」の美しさが、日本美の根底にあるものである。

しかしこれからは家に関して「はかなさ」の文化は、退いてもらわなくてはならない。⁽⁴⁾

家屋という視点でみたとき、二一世紀のライフスタイルの基本的な特徴がライフサイクルの長さにあるとすると、欧米の文化はすでに二一世紀に適した体質をもっているのに、あまりにも「使い捨て」体質が強い日本の文化は変質を迫られている。

マザーグースに歌われたロンドン橋の建設が一〇七〇年、石造化が一二〇九年である。ヨーロッパでの都市の石造化の始まりの指標として使えると思う。不燃化しないで都市化することは、火災のリスクが大きい。一般に集密化・効率化すると危険度は高くなり、安全化の技術は主として分散化・非効率化となる。日本では都市の不燃化は、第二次世界大戦の後に行われた。もともと木造で稠密^{ちゆうみつ}な巨大都市をもち、空爆というリスクには耐えられない構造だったので、空爆の可能性をみたときに日本は戦

争を止めなければならなかった。

ヨーロッパは、不燃化、長持ち化という建築文化を築いた上に、近代主義を載せた形になっている。日本では、はかなさの美意識をもち続けながら、鉄筋コンクリートの文化を築いていた。少なくとも一〇〇年は使える家をもつということが、これからの日本人のライフスタイルになるべきだろう。

そして、一〇〇年後に使い捨てにするのではなく、再生する。⁽⁵⁾一〇〇年前の家を再生し、一〇〇年後に再生に耐える形で残さなくてはならない。

(加藤尚武『先端技術と人間』より)

問一 傍線部(1)「使用年数が無限になることを意味する」とあるが、筆者はどのような意味合いをこめて、「無限」と表現したのであろうか。説明せよ。

問二 傍線部(2)「その時」とは、どのような時か。二十五字以内で説明せよ。

問三 傍線部(3)「普請をする」とは、簡単に言うところのことか。説明せよ。

問四 傍線部(4)「家に関しては『はかなさ』の文化は、退いてもらわなくてはならない」と筆者は述べているが、それはどうしてなのか。五十文字以内で筆者の主張の理由を述べよ。

問五 傍線部(5)「一〇〇年前の家を再生し、一〇〇年後に再生に耐える形で残さなくてはならない」と、強い調子で筆者が訴えているのは、どのような考えに基づいているのか。説明せよ。